

牧師所感：死と向き合って己を知る

人生の終末(92)を生きる筆者は、今迄に経験したことのない苦しみの中で、余生を生きる。歳を取ると歩くのが不自由でヨタヨタと歩く哀れさ。人によって健脚の人もいよう。しかし己はそうでない。自分に愛想が尽きる。牧師として、信徒の不幸に飛んで行ってテキパキと指示が出来ない場合の苦しみである。けれども若い時(80代まで)、思うがままに体を動かしていた己を筆者は知っている。だが苦しみばかりではない。今日まで生かして下さった神に真心から感謝をお捧げ出来ることを喜ぶ幸せである。

さて筆者もいつの間にか歳を取って、真剣に自己と向き合うことが出来る幸せである。長い生を活かされて“死と向き合って己を知る事”が出来た事だ。

さて、世の中には年若くて病気になって死の苦しみにもだえている人々が大勢おられる。時として、筆者も病いによって苦しむ時は常に“曠野の詩”を思い出す。その中の一片を記す。

愛の花

新井 久仁子

神さまが 私を

つか 捄まえて下さらなかつた頃は

北風にヒュウヒュウと吹かれながら

冷たい土の上にペタンと座つて

すゝり泣いていた自分の姿が

ハツキリ見えたものだつた

あれから一年

神さまへの道を見つけた私は

もう泣いてはいない

北風も吹いてはいない

寂しければ自分で

花を植えてあるく

神さまへ通じる

一本の道に ——

ほら、行く手にイエスさまが

こつちを向いて見守つていて下さる

寂しければ自分で植えてあるこうよ

愛の花を ……

(埼玉県の人、療養)